

俳句に於ける写生

山口青邨

写生と言っても、ただ形だけを忠実に写すといふのではない、写真のやうに何も彼も写すといふのではない、花を見てその形が面白ければその形を写す、その色が面白ければその色を写すのである。

写すといふけれど、これは機械がうつすのではない、形が面白いと見る——そのことは、その人個人の感覚であり、頭である。その頭、その感覚が芸術的であるか非芸術的であるかによつてわかれるのである。

ここに一本の木、一本の草がある、その中から何か面白いものを発見するといふことは、その人の頭であり、感覚である。して見ればその一木一草は絶対的なものではない。人によつての相対的なものである、——ここがまた科学とも違ふところである。

普通赤いと認識してゐる花の色でも、詩人はこれを紫と見、朱と見、黄色と見、あるひとは黒と見るかも知れない。このことは形に就ても言へることである。真直な電柱、必ずしも表現上には真直とはしないかも知れない、所謂デフォルマシオンの技巧を用いるかも知れない。

写生派の人達の写生はここまで進んで来てゐる。——然し自然は深く、そして永遠であり、無尽蔵である、芸術家がこれを閑却してよい筈がない、ロダンはあるあして人間の躰ばかり、いぢくつていたやうに思ふが、自然をおそれ、自然に学ぶことを忘れなかつた。